

# 引き継ぐ覚悟

松井 とし

昨年のお茶の水女子大学創立百三十周年に続き、  
今秋、附属幼稚園が創立百三十周年の記念の時を迎える。前年の女子高等師範学校創設に続き、当時、  
国はまず附属幼稚園を、その二年後に附属小学校を  
設置している。最近、幼稚園と小学校の連携の必要  
性が広く認識されるようになり、ボトムアップの教  
育が注目されるようになったものの、なかなか理解  
を得られない実情を考えると当時の関係者の先見性

に敬意を表さずにはいられない。  
東京湯島で産声をあげた附属幼稚園は、関東大震  
災後の仮園舎時代を経て、一九三三年に女子高等師  
範と共に、ここ大塚二丁目に移転してきた。以来七四  
年、耐震性はもとより当時の建築の粹を集めた園舎  
は、大きな改修を行うことなく今なお現役の役割を  
果たしている。多くの子どもたちがこの園舎と園庭  
で、それぞれこだわりをもって日々の生活を繰り広

げ、巢立っていく。

玄関から突き当たり奥の遊戯室までひと筋に続く長い廊下、高い天井、「森」や「海」など各保育室のクラス名を表すステンドグラスは、この建物の象徴となっている。ステンドグラスの制作者は不明だが、壊れたら復元は難しいとされている。せめて映像による資料を後世に残しておくことの責務を痛感し、このたび凸版印刷に本格的な撮影を依頼した。

長く広い廊下はもとより、柱が一本も使われていない遊戯室、各保育室の床材は厚いムク材が使われており、今後もまだまだ削って修理することができるとのことだ。しかし、水の使用頻度の高い各保育室の手洗い場の床はさすがに朽ち果て、既に創立当時とは質の違う現代の木材で修理されている。また、床下のスチームの蒸気漏れが原因で、床のどころどころが、盛り上がってしまった。床下のスチーム漏れは全面的な配管の取り替えが必要であるということになり、今春大々的な工事が行われた。今後もこの歴史的な建造物の維持には、単なる修理

ではなく、質にこだわり復元というコンセプトで臨んでいかなければならない、と考えている。

この幼稚園の環境の大きな特色は園庭である。多くの幼稚園の園庭がグラウンドであるのに対し高低差のある上下の空間で構成されている。上の空間を私共は「おやま」と呼んでいるが、そこには幹周り六メートルの大銀杏が枝を広げ、四季折り折りの環境をなしている。春の初めの枝々には小さな芽が一斉に出初め、あつという間に大きな新緑をなし、秋には黄金色に輝き、やがて全ての葉は散っていく。子どもたちは一年中、銀杏に抱かれるように遊び、時にはシートを敷いてお弁当を食べる。落葉の時期には金色の落ち葉を巻き上げ、まるで銀杏の精のように興ずる姿も見られる。

「おやま」の上と下は何本かの小径により繋がっており、回遊することができる園庭である。ある時、おやまへ続く小径で五歳児のハンクグライダーの実験が行われたことがあった。この時の情景は今も私たちの心に焼き付いている。一人の男児が試行錯誤

した自作のハンググライダーを背負い坂道を走り下  
りることを繰り返した。周りには同じクラスの友達  
の他、三歳児の子どもたちや担任も取り囲み大騒ぎ  
であった。そのうち室内にいた担任の所へ仲間の男  
児が息せき切って「せんせい！うちわ貸して！

たくさん！もつとたくさん」と言いに来た。担任  
が急いで数本のうちわを手渡すと、男児は踵を返し  
走っていった。そして坂道を走り下りる男児をみん  
なで一斉に扇いだ。ハンググライダーを背負ったそ  
の男児は「からだがふわつと浮いた」と実感し、周  
りの子どもたちも口々に「確かに飛んだ」と言い、  
そこに居たみなが納得したのだった。運動会の前後  
から冬場にかけては子どもたちの「やま周りマラソ  
ン」が盛んになる。

「おやま」の奥には、大学附属の零歳児から三歳児  
までの乳児が生活する「いずみナーサリー」の出入  
り口があり、乳児と幼児がごく自然にかかわり合う  
場面も多くなった。大学の生活科学部発達臨床心理  
学講座を中心に「幼保の発達を見通したカリキュラ

ム開発プロジェクト」が組織され、乳児の発達研究  
が始まった。質の高い乳児保育のあり方、二歳児と  
三歳児の接続について等、今後の研究の成果が期待  
されている。

斜面の木々の間には水道栓が密かに配置され、ま  
るで山から清水が湧き出てくるかのようだ。毎年夏  
の気配を感じると、年長児を中心にデッキブラシで  
川の掃除を始める。斜面の下に作られている玉石を  
配置した川の中で、水に触れて遊んでいるうちに思  
わず被っていたカラー帽子を洗濯し始め、手近な木  
の枝に干す子どもたちの後ろ姿が微笑ましい。この  
ような人間の本能ともいえるような感性を発揮する  
場は、もはや幼稚園にしかないのかも知れない。

このたび旧い写真を見直して驚いたのだが、移転  
当時の一九三三年には斜面に桜は植えられているも  
のほとんど芝生で覆われており、この園庭が造園  
されたものであることが明らかになった。それにし  
ても、もし幼稚園が現在地と反対の護国寺側の平坦  
な地に位置していたら、現在とは全く異なる風情で

あつたらう。茗荷谷の地形を活かし、上下二段の園庭を造った先人のセンスは驚くばかりである。子どもにこそ本物を、上質な物を、という理念が貫かれている。

さらに一九三七年の世界教育会議の時に作られた写真集を見ると、園舎の外観、川の辺り、バラの東屋の辺りは現在とほとんど変わっていない。園庭中央の桜の老木も枝振りからして当時からかなりの大木だったように思われる。桜はここ数年勢いがなくなり、二年前に延命措置を施した。今は空に向かって高くそびえている玄關脇のヒマラヤ杉は屋根の高さと同じくらいに写っている。

ある時、五歳児の女の子が「のんびりできるところを教えようか」と話しかけてきた。後からついて行くと、そこは「おやま」の上に建つ小さなログハウスだった。屋根の上に座って、護国寺方面の空を眺めると「のんびりできる」と言うのだった。二人で青い空を見ながら「幼稚園こそ子どもがのんびりできるところでなければならぬ。それにしても、

ここが東京のほぼ中心部に位置する文京区とは思えない」と感じ入ったことだった。

長く広い廊下を四歳男児が下を向いて、一歩一歩踏みしめるようにこちらへ向かってくる。すれ違った私は思わず「A君何を考えているの？」と声をかけた。彼はしばらく歩を進めてから振り返り、毅然と「誰と遊ぶか」と言った。友達との諍いの後だったかも知れない。長い廊下を歩くことは自分と向き合いながら、気持ち落ち着かせ、考えをまとめる大事な時間だったのだろうか。

また、広い廊下は子どもたちにとって格好の遊びの場だ。いろいろなお店を出して作った物を売ったり、ごみや積み木を組み合わせてままごとの場したり美容院や図書館を開いたり、いつも賑わっている。このような環境により異年齢交流がごく自然な形で行われ、現在の保育の特色をなしている。入園当初の三歳児を支える五歳児のかがいしい姿もその一例である。入園式の日、五歳児は三歳児の手をつなぎ長い廊下を共に歩き遊戯室へ誘導する。次の

日からも小さい人のお世話がしたい子どもたちは、降園時の支度を手伝ったり、歌を歌って聞かせたり、三歳児が幼稚園に馴れ親しんでいくことができようさりげなくかわる。大きくなった自分を感じつつ、自分が役に立っている自己肯定感に満ちているのだろうか。子どもたちの横顔は真剣で且つ晴れやかだ。この五歳児（時には四歳児も）のお手伝いを支えているのは、三歳児の子どものたちの保育をしつつ、実は五歳児をも受け入れている三歳児の担任である。学年を超えた担任同士の信頼関係があればこそ実現するチームティーチングである。

私共は、子どもたち一人ひとりが自分でやりたいことを見つけ、存分に遊び、遊びの中に学びを見いだすことができるように環境を整える。そのために教師は子どもたちとの信頼関係を丁寧に積み重ね、その絆を基盤に彼等の主体性を支え、共に日々の生活を創っていく。たとえ一日の生活の中で心がくじけることがあったとしても、降園する時には「今日来てよかった」と思うことができるような一日を保

障したい。

この保育理念はずっと長い間引き継がれてきたが、最近の都市化、核家族化などの社会環境の変化を受けて育ってきた最近



の子どもたちにこそ必要な理念であろう。子どもたちの生活を教師の指導計画にはめ込んでいくことはしない。しかし子どもたちの入園までの経験の差が大きくなってきており、教師は一人ひとりの発達の過程をとらえ、見通しをもたなければならぬ。その上でその子どもに合った言葉をかけ、子どものイメージの実現のための援助をする。行きつ戻りつする子どもたちの発達の状況を的確に捉えつつ、三歳児から一人ひとりの心の安定を基盤に、遊びの充実にかかわり支え続ける。遊びや友達関係が広がる四歳児を経て、五歳児になると「ともだち」の分野を「なかま」と捉える。子どもたち一人ひとりのよさやアイデアが響き合い、協働的な姿勢が生み出されるよう、教師には人と活動をつなげていく役割が求

められる。自らが日々新鮮に、柔軟な心とからだで楽しみ、子どもにとって意味ある生活を保障しなければならぬ。

子どもたちを取り巻く環境は大きく変わってきている。子どもの周りには危険がいっぱいで、天災だけでなく、不審者対策の訓練も必須となった。安全に関する事項は学校評価の最優先の課題である。二〇〇三年度末には小学校から幼稚園の周囲にぐるりとフェンスが設置された。保護者も自発的に地域の安全パトロールのボランティアを始めている。

時代が変わり仕事をもつ母親が多くなった。しかし、以前のように祖父母が迎えに来て降園後は家庭で共に過ごす事例は少なくなり、保護者と契約した人が迎えに来て、降園後は別の集団で二重保育を受ける子どもが増えている。子どもにとって幼稚園の生活と家庭の生活は密接に繋がりに連続しているのだ、その心身の負担は大きい。しかしこれが現実だ。幼稚園の保育を単なるサービスと考える保護者も増えてきている。「もつと長く預かって欲しい」

「研究会でお弁当がある日が短縮になったら、他の日に補って欲しい」などの要望が保護者アンケートに寄せられる。一方「入園前は昼寝はしなかったのに、最近は帰宅すると昼食もそこそこに寝てしまふ。親子で遊ぶ日に参加し、幼稚園の短い時間が子どもにとってどれほど密度の濃い時間であるかわかった」と気付いてくださる保護者もいる。

多様な価値観が氾濫する中、幼稚園に課せられている課題は、子どもと共に保護者を支えることである。保護者参加の機会を増やし、その幼児理解を育成する。一方、いつの時代も子どもたちの真の幸せを願う専門家として、子どもたちの代弁者として、質の高い保育実践を通して幼児期の教育の本質をきちんと発信し続けていかなければならない。

社会の変化を捉え、課題を明確にし、百三十一年目を引き継ぐには、教師の自覚と自己研鑽、絶えざる「研究」は欠くことのできない条件である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)